

編集とは何か。

——本当ですね。

河野 福音館書店の石田さんがおっしゃった、「歴史を持つ雑誌の編集長を務めた経験がありますを次の世代に渡していく、その一人なんだという———」
———そうですか。

河野 だって『婦人公論』の先輩の主幹には、
だっているわけですから。

———おお、何走か前には、谷川さんのお父さんも
河野 そう、先輩だなんていつたら、うれしく
の一滴」でしかないけど、でも、この一滴もまた
ういう自負のような気持ちもある。。

取材・構成・文

奥野武範

(ほぼ日刊イトイ新聞)

は

ります

反響大の
「ほぼ日」
特集連載
書籍化!

なにしろ、
編集が
好きなんです。

文芸、漫画、デザイン、絵本、医療、ファッション、
写真、アート……ジャンルも、足跡も、十人十色

知ること、伝えることに貪欲であり続ける、
14名の編集者の言葉の果てにたどりついた、

「編集とは何か。」

編集とは何か。

取材・文・構成
奥野武範（ほほ日刊イトイ新聞）

星海社

215



SEIKAISHA
SHINSHO

この非常識なほどぶあつい新書は、ウェブサイト「ぼぼ日刊イトイ新聞（ぼぼ日）」の特集「編集とは何か。」を1冊にまとめたものです。2021年の夏から秋にかけて連日更新し、多くの人に読まれた特集ですが、連載をはじめるとは以下のような「序文」を書きました。

こんにちは、「ぼぼ日」の奥野です。編集者です。この仕事に就いて20年、自分はいまだに編集者にあこがれています。日々「編集って何だろう」と考えながら、自分は編集を通じて何がやりたいのか自問しています。そして、ホームランどころかヒット一本の打てなさ加減を痛感しています。だから、この特集は、まずは「自分のために」はじめました。あの編集者は、いま、どこを見ているのだろうか？ 何を考えて、どんなことをやろうとしているのだろうか？ 教えてくださいとお願いした編集者は、ぜんぶで14人。笑っちゃうほどバラバラで、それぞれに宝石のような14の編集論を、できるだけそのままお届けしようと思います。うっすら予想していたことですが、14人のお話には、ただ「編集者」だけでなく、企画する

人、書く人、売る人、広める人、場をつくる人、舵を取る人、くつつきそうにないもの同士をくつつける人、人と会って新たな価値を生み出す人……いろんな仕事に通じる示唆がありました。編集者でない人にこそ読んでいただき、大いに意見や感想を聞かせてほしい。そういう特集になったと思います。最後に、ほとんど何の見返りもないのに、同じ「編集者」というだけで、それぞれの持ち場で培った智慧と経験とを惜しみなく差し出してくれた14名の編集者のみなさんに感謝します。ありがとうございました。

以上が、特集「編集とは何か。」をやるうと思つた動機と企画のエッセンスであり、それはこうして紙の本になつても変わりません。14人の「編集とは何か。」についての考えは、それぞれに唯一無二の仕事論でありながら、どれも「普遍」に通ずる職業哲学でありました。あと何年あるのかわかりませんが、自分の残りの編集人生の海図、羅針盤となるインタビューばかりでした。

他方で、変わったこともあります。当初「ほぼ日」に掲載されたものくらべると、14本のインタビュー自体が微妙に変わつていのです。ウェブから紙の本へ移すにあたって、あらためて校正をお願いしたからです。結果、ほぼ全員が追加の赤字を入れてくださいました。各編集者から戻つてきた赤字の束を見て、無性に感動しました。みなさん、いちど発表されたものだからとそのままよしとせず、少なくとも時間と労力を費やし、より丁寧に言い換え

たり、より詳しい描写を加えたり、ときには大きく削ったりしていたからです。そこには「新書」にふさわしい表現や文体や描写を、という配慮が当然はたらいっているはずです。また、ウェブから紙の本へ移す際には「横書き」が「縦書き」となり、ウェブ特有の「改行」もなくなり、推測ですが、そうした版面の変化も念頭に置いたうえで、文章のリズムやバランス、句読点の位置などを変えてもいると思います。このあたりの「編集者の指先のふるまい」については、ほぼマニュアル化できない世界の話です。そして、そうした部分にこそ、14人の編集者の流儀や経験、編集感覚が凝縮していると思えました。本書カバーには、それらの中から、河野通和こうの みちかずさんから頂戴した赤字を使わせていただきました。大いなる敬意を込めて。

以前、誰かと話をしているときに「編集の仕事というのは、素材や情報をたくさん集めて取捨選択し、それらをうまく加工してコントロールし、想定される読者層へきちんと届ける職業です」と何気なく口にしました。そして言った瞬間「あ、ぜんぜんちがう」と思いました。たしかにそれは、編集者という仕事の重要な一側面であると思います。そして同時に「編集者という仕事の、あんまりワクワクしない一側面」だとも思うのです。編集という仕事の醍醐味やよろこび、編集者自身に「これだから編集はやめられない」と思わせる何かは、まったく別のところにある。それはけっこう「得体のしれない何か」です。そして、その「得体のしれない何か」こそが「編集」という仕事の真髄だと思います。何というか、編集者つ

て「もつとおもしろくしたい人たち」なんです。この本に登場してくれたどの編集者も、心の中に爆発物のようなものを秘めていました。この非常識なほどぶあつい本を通して、そんなことが伝わったらいいなとも思っています。

書籍化に際しては、本編「編集とは何か。」に加え、古矢徹ふるや とおるさんと藪下秀樹やぶしたひできさんというふたりの編集者へのインタビュをコラム的に挟みました。おかしな読者投稿コンテンツの元祖「VOW」の総本部長（＝編集長・古矢さん）と担当編集者（藪下さん）です。まだ小学生だった自分に「編集者」の存在を教えてくれたのが、他ならぬ「VOW」だったのです。「VOW」総本部（＝編集部）には入れなかったけど、いまの自分へ導いてくださった、ふたりの尊敬する先輩編集者。この特集が本になるなら、絶対に出ていただきたいと思っていました。

また「あとがき」にあたる部分では、ターザン山本！さんに語りおろしていただいています。テーマはもちろん「編集とは何か」。最盛期、数十万部もの発行部数を誇った『週刊プロレス』名物編集長の語る、「編集とは何か。」です。読んでいただけたらわかると思います。誰かがターザンさんのようにはできないでしょう。というか、自分を含め、ほとんどの編集者には無理だと思います。でも、それでも、自分の編集者へのあこがれを思い切り煮詰めてドロドロに濃縮したものが、ターザン山本！さんの「異端の編集論」には、たっぷり含まれていました。

で、そんなことをしていたら、「え？」と二度見るほどぶあつい本になってしまいました

た。どうぞゆっくり、でも最後まで、楽しんでもらえたらうれしいです。話し言葉をベースにしているので、思った以上にスイスイ読めると思います。そしてもし、この本を読んでもくれた人の中から、将来の名編集者がうまれるようなことがあったら！ それこそ「編集冥利」に尽きると思います。きっと、夜空の彼方へ消えていく特大の満塁ホームランと同じくらい、うれしいことだと思います。

2022年2月 奥野武範（ほぼ日刊イトイ新聞）

新谷学さん 『文藝春秋』編集長 序・編集ほどおもしろいものはない。 13

物語×編集 **石田栄吾さん** 『たくさんのふしぎ』編集長 61

デザイン×編集 **津田淳子さん** 『デザインのひきだし』編集長 109

LOWEのじやう 1 ただのオマヌケなんだから。 155

ケア×編集 **白石正明さん** 医学書院『ケアをひらく』シリーズ 163

アート×編集 **岩渕貞哉さん** 『美術手帖』総編集長 211

漫画×編集 **金城小百合さん** 『週刊ビッグコミックスピリッツ』編集者 259

『LOWEのじよ』 2 間違えてくれてありがとう。 305

ファッション×編集 **鈴木哲也さん**

クリエイティブディレクター／『honeyee.com』創刊編集長 311

新書×編集 白戸直人さん 中公新書 前編集長 359

絵本×編集 土井章史さん トムズボックス代表 409

LOWEの「と」③ 怒る気がフニャフニャする。 455

文芸×編集 矢野優さん 『新潮』編集長 461

写真集×編集 姫野希美さん 赤々舎代表 507

プロデュース×編集 久保雅一さん 小学館 553

『VOWのじゅ』4 「VOW VS A」戦争」 603

インタビュー×編集

新井敏記さん

『SWITCH』編集長

615

河野通和さん

前ほぼ日の学校長 結・編集者とはどういう人か。

667

あとがきに代えて 今いちばん怠慢なのは編集者である。ターザン山本！ 716

この本の出典について 731

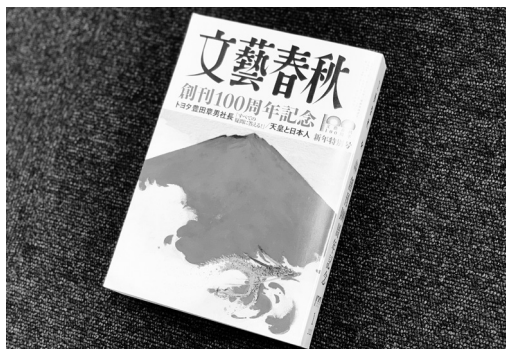
初出一覧 732



序・編集ほど
おもしろいものはない。

新谷学さん

『文藝春秋』編集長



雑誌『Number』『マルコポーロ』から「文春砲」で知られる『週刊文春』へと移り、数多のスクープをものにしてきた編集者。さまざまな雑誌に関わってこられました。が、つねに根っこにあったのは「編集ほどおもしろい仕事はない！」の思い。それは、2022年で創刊100周年を迎える月刊『文藝春秋』の編集長に就任した現在も変わっていないそうです。編集とは何か。新谷学さんに、うかがいます。

新谷学（しんたに・まなぶ）

1964年群馬県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。1989年に文藝春秋に入社。『Number』『マルコポーロ』編集部、『週刊文春』記者・デスク、月刊『文藝春秋』編集部、ノンフィクション局第一部長、『週刊文春』編集長などを経て、2018年より『週刊文春』編集局長。2020年からは執行役員として『Number』編集局長を兼務。2021年7月より『文藝春秋』編集長に就任。著書に『「週刊文春」編集長の仕事術』（ダイヤモンド社）など。最近著に『獲る・守る・稼ぐ 週刊文春「危機突破」リーダー論』（光文社）がある。

テレビ局に落ちて出版社へ。

——自分は、いまだに編集者に憧れています。小学校の高学年くらいから、『宝島』に連載されていた「VOW」を、よく読んでいたんです。

新谷 ああ、そうなんですか。

——そのとき「編集者」という人がいるのか、ということを知りました。仕事の内容はよくわからなかったものの、それは、この「雑誌」という、エネルギーに満ちたものをつくる人で、楽しそうだなあと思っただけです。

新谷 楽しいですよ。

——新谷さんは当初、テレビ局に入りたかって、思ってたより違ったそうですね。

新谷 はい。バラエティ番組をつくりたくて。「サタデー・ナイト・ライブ」だとか「モンティ・パイソン」だとか、ああいう政治風刺バラエティとか、権威とか偉そうな人をシニカルにおちよくくり倒す……みたいな番組が好きだったから。

——現在に通じるものが、あるような。

新谷 就職活動中に、日本テレビへ番組の企画書を郵送したら採用されて、青田買いのセミナーに参加することになった。そこでの講師は「今夜は最高！」のプロデューサーで、タモリさんも来てました。でも、最終選考で落ちちゃったんです。

——あら、そうですか。

新谷　で、さあ、どうしようと思ったときに出版社という選択肢もあると気づき、新潮社の試験を受けました。新潮文庫のことは、知っていたんです。でも、二次面接くらいだったのかなあ、面接官に「キミは『週刊新潮』を読んでののか」って聞かれたから、正直に「読んでません」って答えたら、「キミは、あまりジャーナリストイックな人間じゃないようだな」って言われたんですよ。

——なんと。

新谷　それで「別に『週刊新潮』を読んでいるからジャーナリストイックだってわけじゃないと思いますよ」って答えたら、「あ、もういいよ、キミは」って言われて。やべえ、これ落ちたかなあって思ってたなら、本当に落ちてました。

——そうですか……（笑）。

新谷　でね、ちょうどそのころ、大好きだった石原裕次郎さんが亡くなって、ショックを受けてただけで、フラッと本屋さんへ寄ったら『さよなら石原裕次郎』というタイトルのムックを見つけたんです。裕次郎さんは晩年、会話もできない状態だったらしいんだけど、病床で書いたメモの写真が載ってたりして。

——メモ。

新谷　うん、最後のメモには「ポカリ」とあった。喉が渴いた、ポカリスエットが飲みた

いと。それが絶筆だったって、そのよくできたムックに書かれていました。

——それは……印象に残りますね。

新谷 他にも裕次郎さんの歴代の愛車やワードローブが詳しく紹介されていたり、細かいところまで行き届いたつくりでした。で、出版社の名前を見たら、そこに「文藝春秋」と書いてあったんです。

——じゃあ、そこではじめて？

新谷 ええ、文藝春秋という会社を知ったんです。調べてみると『週刊新潮』みたいな『週刊文春』という雑誌も出していたので、入社志望書の「よく読む雑誌」欄に『週刊文春』と書いて面接にのぞみました。

——前回の経験を生かして！

新谷 案の定、面接官が「え、キミは『週刊文春』読んでるのか？」って聞いてきたから、「もちろん読んでます！」って答えたら、「だってキミ、『週刊文春』のカンって字は間じゃないよ」って言うんですよ。『週刊文春』と間違えて書いていたんです。

——それは……マズいですね（笑）。

新谷 それであわてて、「すみません、本当は読んでません！」と、白状したんです。

——おお（笑）。

新谷 そしたら「正直でよろしい」となりまして、トントントンと最終面接まで進みまし

た。最後は社長以下、大勢の役員に学生ひとり、みたいな面接だったんです。そこで「キミは編集志望と書いてあるけど、経理に行けと言われたらどうするの？」と聞かれたんで、「それは、いま経理ではたらいっている人に失礼じゃないですか」って、まあ、思わず言っちゃったんですよ。

——なかなか思い切った感じの……。

新谷　そしたら「うん、それもそうだよな」って。それで、あ、文藝春秋って、もの言いやすい会社だなあと思いました。懐が深いというか……ある意味ではいい加減なのかもしれないけど、鷹揚な会社だ、と。で、入ってみたら実際、そうでしたけどね。

——つまり、編集者になりたくて……じゃなく。

新谷　そうですね。まあ、たまたまですね。でも、それから30年以上、基本的に編集の仕事が続けてきましたけど、つまらないと思ったことは一度もない。編集の仕事って、本当におもしろいんです。いまでも、心の底からそう思ってます。

——当時の出版社って、いまの何倍も就職倍率が高かったと思うんですけれども。

新谷　そうかもしれないですね。

——だから、すごく本や雑誌が大好きで、いろいろ詳しい人だけが入れるのかなあと、中学生の自分は思っていたんですが。

新谷　わたしの場合は、ちがったんですよ。雑誌にしても『POPEYE』とかマガジンハ

ウスのファクション誌ばかり、読んでましたから。

——『週刊文春』どころではなく。

新谷　だから最初に配属された『Number』では、右も左もサツパリでした。

——そもそも「雑誌の編集」って何をやるのか、よくわかりませんしね、外からは。

新谷　そう。あるとき、配属されたばかりのころ、編集部先輩から「イラスト取りに行つてこい」と言われて。相手は「みうらじゅんという人だ」と。

——ええ、みうらさん。当時は、まだ……。

新谷　それなりに、有名ではあったけど、どういう人だか、よくは知りませんでした。で、事務所へ行ったら、「これこれ、もうできてるよ」と言われて、高校野球なんかのイラストで、「オレ、あまり野球に興味ないんだよなあ」とかって言うんです。

——よくおっしゃいますよね、野球については。

新谷　で、「興味あるのは『巨人の星』くらいだから」って言うんで、「あつ、『巨人の星』なら、オレもめっちゃめっちゃ好きなんですよ」って。そこから3時間『巨人の星』トーク。

——先輩のお使いをほったらかして……（笑）。

新谷　「闇鍋を食う名シーンがあつたよなあ」とか、「オーロラ三人娘の立花ルミが歌ってたあの曲がさ」みたいな話をえんえん語り合つたんですよ。そしたら、みうらさんが『巨人の星』の聖地巡礼みたいな企画、できないかなあ？」って。

— 聖地巡礼。

新谷　それはおもしろそうだと盛り上がって、その後、編集会議のたびに提案し続けていたら、あるときページが空いちゃったとかで「おまえが前から言ってる例の巡礼の旅ってやつ、やってみるか」とデスクに言ってもらったんです。それでつくったのが『巨人の星 巡礼の旅』という企画。

— みうらさんの発案だったんですね。

新谷　わたしが星一徹で、みうらさんが星飛雄馬で。ジャイアンツのキャンプの近くの宮崎の日南海岸にある、飛雄馬と日高美奈が愛を語る砂浜に行ったり、飛雄馬が投げる「血染めのボール」を再現するのに、カッターで指を切りつけて血をつけようと思って、会社の医務室の先生に怒られたり……『巨人の星』の細かいコマを命懸けで再現していく企画だったんだけど。

— すごい情熱(笑)。

新谷　ページができたときは、感動しました。

— 感動。

新谷　尋常じゃない労力を注ぎ込んでいるんです。みうらさんとふたりで徹夜したりして、まったく疲れることもなく、もう、おもしろくてしょうがなかった。読者からも反響があったて、「編集の仕事ってこんなおもしろいんだ」「興味あることをとことん本気でやれば、こん

なに楽しいんだ」ということを学んだ企画でした。

——「編集って、おもしろい！」ですか。

新谷　で、この巡礼の旅はシリーズ化をしまして、次は、同じく梶原一騎さん原作の『あしたのジョー』巡礼の旅をやりました。いちばん再現するのが難しかったのは、矢吹丈のライバルの力石徹が、豚にまたがって少年院を脱走する場面。みうらさんとああでもないこうでもないと考えていたら、ちょうど編集部に、「ビッグロデオ大会を開催しますので取材してください」というプレスリリースが届いていたんです。で、「これしかない！」と。

——よりよって「ビッグロデオ大会」の取材依頼が、そのタイミングで？　なんかもう、神がかってますね（笑）。

新谷　茨城の山奥まで行って、みうらさんがビッグロデオ大会に参加しました。設定として少年院の服を着てなきゃいけないんで、衣装屋さんかなんかで選んだ少年院風の衣装をみうらさんに着てもらって、豚にまたがってる場面を撮影しました。

——編集という仕事の「幅」を感じます（笑）。

新谷　その次が『タイガーマスク』巡礼の旅です。あのお話には、「虎の穴」という、悪役レスラーの養成組織が出てくるんです。富士山麓にあるんですけど、そこには、虎に羽根の生えた「魔神像」が立っている。

——ええ。夕日にきらめく感じで。

新谷　当然その「魔神像」を再現したいねってみうらさんと話してたら、みうらさんの美大時代の親友で、ちょうどいいやつがいるって話になって。粘土で何でも作っちゃうトット・リーさんというかたなんですけど、羽根の生えた虎の像を見事に再現、それを富士山麓に持ってきていき、富士山をバックに写真を撮影したんです。

——はあ……（笑）。

新谷　そしたら雑誌の発売から間もなくして、お世話になっっている近鉄buffaloの広報部長さんから電話がかかってきたんです。何の用事かなと思ったら、「いまの『Number』に出てる虎の穴の像は、どこで売ってるの？」と。わざわざつくったんですと話したら、「まいったなあ。うちの野茂がほしがっちゃってさあ」と。

——野茂……英雄さん？　あの大投手が！

新谷　それで、みうらさんと相談して「特別に差し上げましょう」となりました。あちらのご好意で料亭で贈呈式を行うことになったんですが、当日、待ち合わせ時間を過ぎて「魔神像」を持ったみうらさんが現れない。

——えっ。

新谷　魔神像を贈呈するための場ですから、魔神像がないことには話も弾まないんです。非常に気まずかったんだけど、やっと30分遅れで到着したみうらさんに事情を聴いたら、タクシーの中で羽根が取れちゃったんだと。

— わはははは、魔神像の大事な羽根が！（笑）

新谷　で、急いでトット・リーのところへ行って、修復してもらってきたんだそうです。

— 直すトット・リーさんもすごい（笑）。

新谷　ともあれ、それを野茂投手に差し上げたら、非常によろこんでくれました。

— もう……最初から最後までおもしろいです。でも、野茂投手って『タイガーマスク』が好きだったんですね。

新谷　そうなんです。お礼にみうらさんは、「虎の穴・野茂英雄」と書いたサインボールをもらってましたよ。みうらさん、いまでも大事にされていて、ご自身のイベントのときに、じまんげに展示してたりとかしてますよ。

— 魔神像とサインボールの交換トレード。

新谷　4 発目としては、ブルース・リー巡礼の旅というのを……。

— まだあるんですか（笑）。

編集者って、おもしろい！

— みうらさんとは、いまも仲良しですか。

新谷　頻繁に顔を合わせるわけじゃないけど、会えばすぐにあのころに戻れる（笑）。永遠

の戦友のような感覚がありますね。わたしが2012年に『週刊文春』の編集長になったときも、真っ先に連載してほしいと思ったのが、みうらさんだったし。

——それが「人生エロエロ」ですか。

新谷　ずっと「エロ」にこだわり続けてきたみうらじゅんという男の、ふうてん 瘋癲老人日記を書いてほしい、と。老いとエロとに向き合い続ける、いまのリアルを書いてくださいよって。9年経ってなお連載中です。

——貫して、編集をおもしろがっている、その姿勢が伝わってきます。

新谷　最初の一步を踏み出してみるのが大事、なんだよね、やっぱり。「こんなことできたらすげえな」「こんなことできたら、おもしろいな」と思ったら、とりあえずはじめてみる、動いてみる。新人当時から大切にしていることです。これは『週刊文春』でスクープを取りにいくのも、同じです。

——その気持ち、根っこにある。

新谷　「いや、そんなことあるわけねえよな」と思っても「まてよ、本当だったら大変だぞ!？」と考え直して、行動してみる。だってクリーンなイメージの某大臣が、いまどき白昼堂々大臣室で現金もらうかなあと。しかも羊羹の紙袋の底に現金って、完全に時代劇みたいな話なわけだしね。

——おぬしも悪よのう……の世界が、まさかこの現代の日本に。

新谷　　そう。でも、そこで、「待てよ、本当だったらどうする!？」と動いてみるのが大切。つまり、自分の発想だとかプランに制約をかけない、ブレーキをかけないという姿勢が、編集者にとっては、非常に重要なことだと思っっています。

——聖地巡礼企画のときと、同じですね。

新谷　　うん、実現したらすごいぞ、そんな事実が明るみに出たら大変だ、「これ、すげえじゃん!」、そういった発想とか出来事に対して、ありったけの情熱を注ぎ込み、ノーブレーキで、フルスイングする。それが編集という仕事の醍醐味です。さらに、その楽しさを一緒に味わってくれる読者がいると、いっそう幸せを感じますね。

——その「教え」は、会社の先輩から？

新谷　　もう亡くなられてしまったのですが、『Number』の設楽敦生編集長から、「新谷くん、編集者というのは、じつにおもしろい仕事なんだ」って、ずーつと言われ続けたんです。それも会社にいるときだけじゃなく、夜な夜な連れまわしてもらった飲み屋でもね。

——みっちり仕込まれたと。

新谷　　設楽さんって逗子に住んでいたから、朝から海へ入ってワカメを採って、そこに醬油と鰹節をかけたのを持って、夕方近くなってから、入社してくる。そういう人なんです。それで、みんな集まれーとか言っって編集部員と冷蔵庫に入ってるビールとワカメで、酒盛りはじめちゃうような。

——はー……すごい（笑）。

新谷　設楽さんは編集長だから校了までは大した仕事もなく、わたしも新人だから、大した仕事がない。それで18時をすぎると「新谷くん、ビールつきのメシ行こうか！」と誘われて、新宿へ出る。

——さっき来たばかりなのに（笑）。

新谷　そう（笑）、で、当時「魔の三角地帯」と呼ばれていた馴染みの店3軒をグルグル、グルグル、永遠に回り続けるわけです。ふたりとも酔っ払ってるから、さっき行ったことを忘れてるんですよ。

——無限ループで（笑）。

新谷　その魔の三角地帯をグルグルしながら、「編集者って、おもしろいんだ」「やりたいことを、やっていいんだぞ」と言われ続けたんですよ。

——設楽編集長も、きつと、編集の仕事を楽しんでいたんでしょね。

新谷　そうですね。骨の髄までね。設楽さんの教えを守って、前例のないことを、随分やりましたよ。

——みうらさんの企画以外にも……。

新谷　たとえば「ホームラン特集」とかね。これは、当時、一世を風靡していた近鉄バファローズのラルフ・ブライアントという選手を表紙に起用した特集です。

——豪快なホームランバッターですよ。よく覚えています。

新谷 わたしはこのときまだ入社3年目で、プランを出したら「お、いいな」と言われたんですが、まだ若いから、先輩と組んでやれと言われたんです。でも当時から生意気だったんで、「設楽さん、それはおかしいっすよ。これはオレのプランなんだから、オレに好きにつくらせてくださいよ」って主張しまして。

——そしたら……。

新谷 うん、設楽さんも懐の深い人なんで、「それもそうだな」と。結局、入社3年目のわたしの下に2年目と1年目がついて、若手3人でつくるといいう暴挙に出て。

——暴挙なんですね、それは。

新谷 暴挙です。写真は、有名な久家靖秀さんっていう、のちに宇多田ヒカルさんの『Hi-Fi Love』を撮る人をお願いして、打ち合わせをしたんです。

——ええ。

新谷 そしたら久家さんが「ブライアントって過剰なイメージだよ」って言うんですよ。たしかに東京ドームの天井のスピーカーに打球をぶついたり、ホームラン4連発とか打っちゃったり。

——そういう意味で、「過剰な人」。

新谷 だから「バズーカ砲を撃たせようよ」って。

——「だから」って（笑）。

新谷　バズーカ砲ってどこから借りればいいのかいろいろ調べていたら、当時、日テレの『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』で、「早朝バズーカ」って企画をやっていたことに思い至ったんですよ。

——ハッキリ覚えてます（笑）。当時、サンコンさんとか島崎俊郎さんが、餌食になっていました。

新谷　そう、芸人さんの寝てる部屋に忍び込んでバズーカをぶっ放すという、もう、めっちゃくちゃな企画なんだけど。「これだ」と思って日テレに電話しました。で、担当の人に相談したら「バズーカ砲だったらいいところがある」と言っ、て、趣味でバズーカ砲をつくっていい埼玉の鉄工所を紹介してくれたんですよ。

——「バズーカ砲だったらいいところ」（笑）。

新谷　で、その社長から、でっかくて重たいバズーカ砲を借りてきて、風呂敷にくるんでバスと電車を乗りついで撮影スタジオまで運んで、ブライアントに担いでもらったんですよ。そのときの写真が、これです。当時、かなりのインパクトがあっただんです。

——いや、いま見ても十分すごいです（笑）。

新谷　このバズーカ砲がよくできていてね、引き金をひくと、煙が出たりするんですよ。ブライアント本人もよろこんじゃって、ノリノリの撮影になりました。結果として「これ、

スポーツ雑誌ですか？」というような、ぶっとんだビジュアルができあがりました。

——評判はどうだったんですか。

新谷　めっちゃめちゃよくて、すごく売れたんです。そのこともうれしかったですね。

——思い切り好きなようにつくって、結果もついてくる。それは、絶対、楽しいですよね。

新谷　あと、日本でもNBAが流行り出したころ、『Number』でも特集しました。シカゴ・ブルズのマイケル・ジョーダンをシカゴからニューヨークまで追っかけたり、悪童と呼ばれたチャールズ・バークレーに「やつぱりやめた」って撮影の約束をすっぱかされたりとか……ね、けっこう大変だったんですけれど。

——おお……はい（笑）。

新谷　とくにバークレーは表紙の予定だったから、次の日の試合後に本人をつかまえて、「あんたを撮るために日本から来たんだ」「このままじゃ帰れない」と食い下がって、試合会場のマジソンスクエアガーデンの会議室に連れ込んで、写真撮影とインタビューをしたんですよね。

——そのときの写真が、そちらですか？

新谷　会議室とは思えないでしょう。

——思えないです。スタジオ撮りといってもわからないですね。

新谷　これも久家さんなんだけど、すごかったよ。非常に限られた条件と時間、設備のな

かで、異常な集中力を発揮して、これだけのクオリティで上げてきたんです。

——いやあ、カッコいいです……本当に。悪童っぷりも、よく出てますし。

新谷　でね、編集部に帰ってきたら帰ってきたで、石崎健太郎さんっていう天才アーティストがイレクターがいるんですけど、この写真をめちゃくちゃ気に入って。表紙に「どうしても日本語を入れたくない」って困ったことを言い出すんですよ。

——中身は日本語の雑誌なのに……ふつうは、ちよつとあり得ないですけどね。

新谷　わたしも、はじめてのNBAの特集で、英語しか書いてなかったら、これが誰なのか、何の特集なのか、わからないんじゃないかなと編集者としては思いましたし、当時の、すぐく部数にこだわりのある頑固なデスクからも「おまえら何を考えてるんだ、あり得ねえだろう」と突っぱねられて。

——やっぱりですか。

新谷　でも、石崎さんがそこまで言うならと、わたしもがんばりました。「この写真を撮るために、どれだけ苦労したと思ってるんですか。オレは石崎さんに懸けたいです！」って言い張ったら、最後はデスクも「根負け」してました。

——通っちゃったんだ……。売行きは……。

新谷　売れたんですよ、これがまた。めちゃめちゃカッコいい表紙だからね。

——はあ……でも、たしかに売れそう。

新谷　もちろん、いつもいつも、そう、うまくいくわけじゃないですよ。いまは、ぜんぶ結果オーライの話だけ選んでしゃべってるんで。

——はい（笑）。

新谷　当然、失敗だったたくさんしているし、怒られてもいますから。ただ、そういうつくり手の異常な情熱、のめり込みが、大きな流れを生み出したりする。そういうことを、お伝えしたいんです。

——はい、伝わってきます。

新谷　その後、NBAの特集は『Number』のキラークンテンツになり、毎回、人気を博しました。誰もやったことのないことをやるのって、やっぱり意味があると思うんです。失敗もありますけど、そのことも含めて。

——未知の挑戦に突っ込んでいく感じとか、失敗にへこたれないのって、新谷さんの性格にもよるんでしょうか。

新谷　イヤなことは端から忘れちゃうんですよ。褒められたことはいつまでも覚えているんですけど。よくカミさんにも言われています。「あなた、それ、また褒められノートに書いておくんでしょう」とかって。

——褒められノート？

新谷　実際そんなノートはないんですけど（笑）、褒められた経験が、どんどん脳に刻みつ

けられていくんです。反対に怒られたことやイヤなことは、すぐに忘れちゃうんだよね。

——いいなあ(笑)。じゃあ、『Number』の時代にいろんな褒められエピソードを溜め込んで。

新谷　　そういう意味でも、やっぱり『Number』が原点なんですよ。わたしの編集人生の編集のおもしろさ、雑誌の楽しさを、あのときたっぷり学ばせてもらったから。

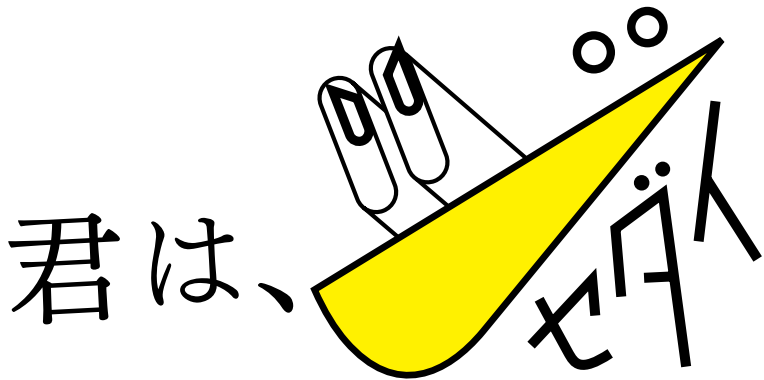
畑ちがいの週刊誌記者になる。

——新谷さんは、編集者に向いている人って、どういう人だと思えますか。

新谷　　上から指示された設計図とかマニュアルどおりにつくるのが上手い人、では決まらないと思います。自分のつくりたいものをつくるんだ、という人のほうが、だんぜん向いていると思いますね。

——新谷さんが、まず、そうですね。

新谷　　いくら編集の仕事でも、言われた仕事を言われたとおりにこなすのは退屈ですよ。自分のやりたいことをやりたいようにやるって人にこそ、おもしろく感じる仕事だろうと思います。上司に気に入られようとしてつくっても、つまらないですよ。結果的に読者もおもしろがってくれない。つくり手の「おもしろがりの熱」って、まちがいはなく、まわりの人や読者に伝わると思ってます。



何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!